

(5) 飛び級試験に失敗

加藤は受験勉強本位の生活には没頭できずにいた。小学生のときには「受験勉強が自分の本業」だと思えたのだが、中学生となるとそうはいかない。しかも、文学に興味を抱きはじめ、「中学校の第四学年に達したときの私は、小説好きの女友だちから借りることのできる本はすべて読みつくしていたし、美竹町の自分の家ばかりでなく、祖父の家にあった内外の小説を読み漁ることに熱中していたのである。高等学校の入学試験〔飛び級試験——引用者註〕は近づいていた。しかしその準備のために必要最低限以上の時間を使おうという気は全くなかった」。



こうして第4学年の末に飛び級試験を受けたが不合格となる。試験に失敗して、入学試験の存外には手強いことを知り、第5学年の1年を中学校に通わなければならないことにはうんざりとした。当時、府立第一中学校から第一高等学校に飛び級で行く生徒は50人ほどいた。したがって、加藤のなかにも屈辱感や焦燥感もあっただろうと思われる。しかし、そういう感覚についてはほとんど触れずに淡々と描かれる。

それは超越していたからか、超越できなく、むしろ一言も触れたくない気持ちが強かったか、はたしてどちらだろうか。

(写真：中学5年生の時の加藤、襟に5年生を意味する「V」が付けられている)